

MfG_J_Unchou_in_Tochio_in_Takanori_shrine



貴渡神社の十二支

Sep, 2024 by Kasuga

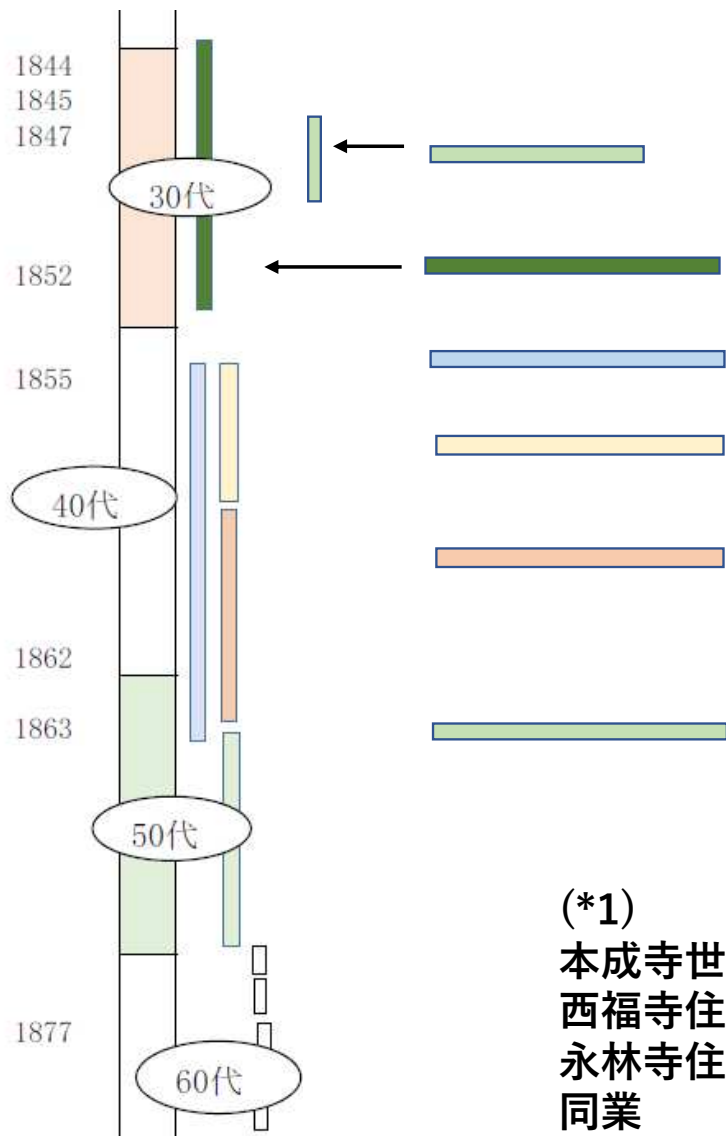
目次

序

1. 貴渡神社
2. 貴渡神社の雲蝶彫刻と十二支
3. 感想、特に「杳目の美」
4. サフラン酒の鰻絵・十二支との関連
 - (1) 羊、戌の疑問
 - (2) 吉澤仁太郎、左官の河上伊吉になったつもりで
5. 寅を白虎にの契機、仮説～鰻絵蔵のデザイン決定の経緯

補足

漢籍をはじめ高い教養の痕跡
神社の社殿彫刻への畏敬



栃尾・貴渡神社

本成寺

永林寺

西福寺

秋葉三尺坊

石動神社

(*1)
本成寺世話人
西福寺住職
永林寺住職
同業

内山又蔵
大瀧和上
弁成和上
小林(熊谷)源太郎

中心人物(*1)との対面
いつ、どのように

依頼の受け方
本人の気持ち

仕事の進め方

それぞれに
ストーリー

それぞれの施主の、それぞれの祈願

+

それらに応じつつ、雲蝶自身の心に秘めた共通の意義、願い

枳尾の貴渡神社の紬織と十二支の繊細な彫刻に、雲蝶自身の意思もあるはずと思うが、見えてきません。

年表図にあるように、若い時の作であり、木彫りの技の発揮を第一に考えたのかも知れません。

とにかく、貴渡神社の十二支は、今まで見てきた雲蝶作品とは異なる、別格の凄み、爽やかさ さえ感じました。

貴渡神社(たかのり)の祭神は、
植村角左衛門貴渡(かくざえもん)

嘉永元年(1848)、栃尾織物の基礎を築き、縞紬を広めた、祭神
貴渡翁(1739－1822)を奉るために建てられた神社です。

最初は植村家の社でしたが、明治2年に村有。

庄屋の角左衛門は、天明の飢饉の1783年、23才の若き長
岡藩主忠精の命により住民救済の仕事にあたり、10年ほど
後、白の縞紬に成功したとのことです。

(栃尾の郷土史家 大崎勉氏の史料より)

角左衛門、縞紬に成功のストーリー

1783年、藩主忠精の命により住民救済の仕事にあたり、村方に産業を興す必要を思い、まず蚕桑機織を奨励。近在の村民(一説には山伏)が魚沼十日町にて越後上布に縞物を見つけ、栃尾に戻り家族に工夫させたという。それを角左衛門が聞いたかは定かではありませんが、1792年には、白の縞紬に成功したとのこと。この後、村人に技栃尾の縞紬術を広め、隆盛に繋がった。栃尾の縞紬ピークは神社創建のころとされる。

(栃尾の郷土史家 大崎勉氏の史料より)

貴渡神社の雲蝶彫刻について

社殿の全体に、石川雲蝶の初期の彫刻である、十二支と紬織の作業の様子が飾られています。

御堂の南北および東の上部側面には五穀豊穡のシンボルの十二支の彫刻がみられます。村の繁栄を祈願したものと考えます。紬織の作業の作品は、養蚕の過程と糸取りから機織りまでの様子が人物の服装・表情で表現されています。中国的な、と指摘する人もいます。今に至る栃尾の絹織物の歴史と伝統を示す、たいへん精緻な彫り物です。

以下は、十二支に絞った、2024年9月の拝観感想記です。

次頁、貴渡神社の十二支の画像 について

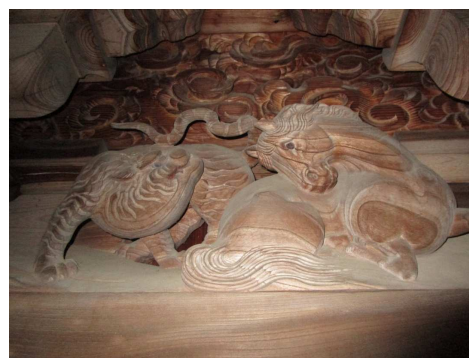
- ①寅は、西福寺の道元を襲う虎に似ているようにも見えますが、やっぱり十二支の寅。
- ②辰の画像のつなぎは、勝手な想像です。
- ③兔に丑の画像は、手振れが目立たぬようにコントラスト調整したものです。
- ④尚、掲げた画像は、デジカメの画像を30%圧縮して、元画像の1/10の容量に抑えています。



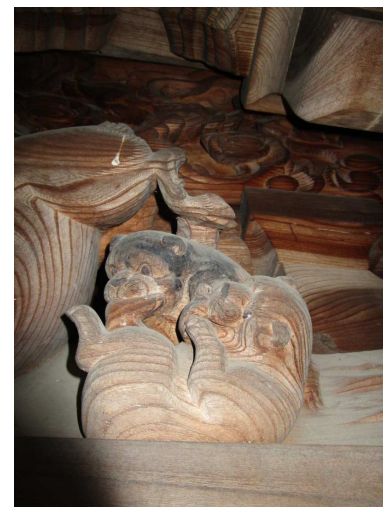
羊に酉30P



申に巳30P



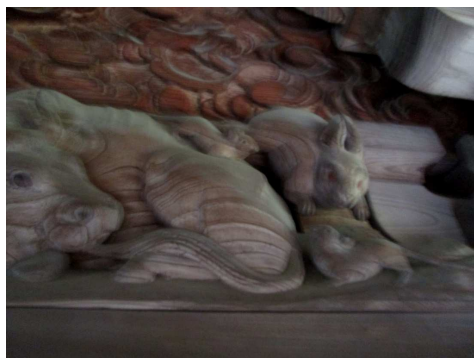
午に寅 30P



戌全体 30P



戌に猪30P



兔に丑_調整30P



辰全体（合成）30P

貴渡神社の十二支を拝観した感想

それぞれの動物の性格、動きまで見えるような彫りの完成度には驚かされます。

1848年の建造ということで180年経過していますが、殆ど傷みが見えないのには感心しました。

村の人たちにより、長年、丁寧に維持管理されてきたのでしょう。頭が下がる思いです。

貴渡神社の十二支を拝観した感想・その2

更に杢目を生かした技に、感動しました。
この杢目の生かし方の一番は、寅では。
申、猪、さらに巳も凄いと思います。

- ①集めた原木の杢目から、その動物の姿勢を
考えて材木を選ぶ。
- ②彫りながら姿勢を微調整し、杢目を生かす。

③ 寅の縞を空目で表現する意図には驚きです。
雲蝶の彫りのセンスは「もはや神業」。

～これについて、おかしい考えに至りました(後述*1)

④江戸木彫刻、空目を重視する石川流の伝統
なのかも知れません。

ここは、小刀とノミを使う仏像彫刻と異なるという
ことで、ノミのみで彫る江戸彫りの特徴の観点から、
注視していきたいです。

サフラン酒の鰻絵・十二支との関連

特別編

長岡南部・摂田屋のサフラン酒本舗の鰻絵、 おかしな形の羊、戌の疑問

この羊、戌が、長岡市栃堀の貴渡神社(たかのり)の
「十二支の彫刻と酷似している」のに気づきました。

この彫刻も、石川雲蝶の作です。

サフラン創業者の吉澤仁太郎、左官の河上伊吉は、
魚沼の西福寺の諸作品を見に、何度も訪問したと云います。
西福寺のみならず、近在の雲蝶さんの彫刻も、見て回ったのでは
ないか、というのが、私の仮説です。

今回、拝観させていただき、疑問が解決した気持ちもありますが、それよりも、そのすばらしさに驚きばかりでした。

吉澤仁太郎、左官の河上伊吉が、

- ①十二支の形を手本にしたいと思ったのは何故か、
- ②羊と戌を選んだのは何故か、
- ③これらの十二支をどう感じたか、

が、知りたくなりました。



貴渡神社
の羊、戌
(石川雲蝶)



木原尚, "越後の
名匠 石川雲蝶",
新潟日報事業社
(2010)



サフラン酒
の羊、戌



もうひとつ気づいたこと、狆は日本の代表的犬種

この雲蝶の戌は、円山応挙(1733-1795)の、
もこもこした、かわいい子犬にも似た感じ。まさに狆です。



石川雲蝶



円山応挙 (ネットより)

1933年に世界で発刊の「犬の世界地図」で日本の犬として紹介されたのが、「狆」。
江戸期の日本の代表的な犬種は狆と、見なされていたそうです。

円山応挙の犬、貴渡神社の石川雲蝶の戌、そしてサフラン酒の吉澤仁太郎/河上伊吉の戌は「狆」かも知れないと思いました。

- ①十二支の形を手本にしたいと思ったのは何故か、
- ②羊と戌を選んだのは何故か、

～貴渡神社でも、摂田屋・サフラン酒でも、
最も異質なのが、羊と戌。

サフラン酒でも、ガイドの説明にゲストの多くが
「そうなのか。変だよね。」とおっしゃる。

貴渡神社でも、やはり、この二つには違和感。

それでも、この羊と戌を鰻絵の手本に選んだ。

～何か、理由があったのでしょうか。

世間的に(この場合、特に戌の狎)、これが
当たり前だったのでしょうか。

絵師グループ(この場合、石川流)の手本帖に
ある表現でしょうか。

③これらの十二支をどう感じたか、

～心象のなかで、「空目の美を生かす」、
「背景の木組みも生かす」という技に驚きも
あったに違いない。でも、鰻絵では不可能。

～では、各々の動物を、鰻を使い、どのように
表現するか。

～では、ということで、サフラン酒の鰻絵の傑出したところの「毛並みを鰻で」、さらに「色の階調変化を鰻で」という技の発揮の発想が生まれたのでは、ないでしょうか。

最後に、“おかしい考えに至りました(後述*1)”の件

これは、誰にでも、お話しできるものではありませんこと、
予め、お断りしておきます。

サフラン酒の鰻蔵の白虎です。なぜ『寅を白虎にし、東面から北面に移すという考え』に至ったか。

もしかしたら、この貴渡神社の寅のあまりの巧みさに、左官の伊吉が仁太郎に『これに負けない寅は鰻では無理だよ』と泣きついたのでは。

仁太郎は、いつも相談する智慧者の高僧に伊吉の泣きを打ち明け、「それでは、寅は、縞のいない白虎に兼務してもらったら如何か。寅と四霊の白虎と同類である。」という解決策をもらったのでは。

今の麒麟の位置に、白虎を置いたら？ マズイ。

それなら西の守護神の白虎が東に座るのを遠慮し、東面から北面に移っていただいたということにしようとの発想も理解できる。そして白虎の位置に、代替として麒麟を置く。麒麟は、朱雀の代替の鳳凰と同じ四霊で座りもいい。

寅 → 白虎 → 麒麟 の見方

北面に移す白虎の位置は、現在の位置でいいとして、申にするのも、いいと思うが、「申を探すという遊び」が失われる。申は兼任にしよう。

現在の配置は、練りに練った考えの結果なのです。

衣装蔵の後、
新土蔵に十二支
を追加を決めた

近在の木彫りの
名匠雲蝶の作品
を見て回る

デザインの完成仮説

伊吉、仁太郎に
「寅の空目の美」
に負けないもの
は無理と泣きつく

高僧の
アドバイス
寅を白虎に

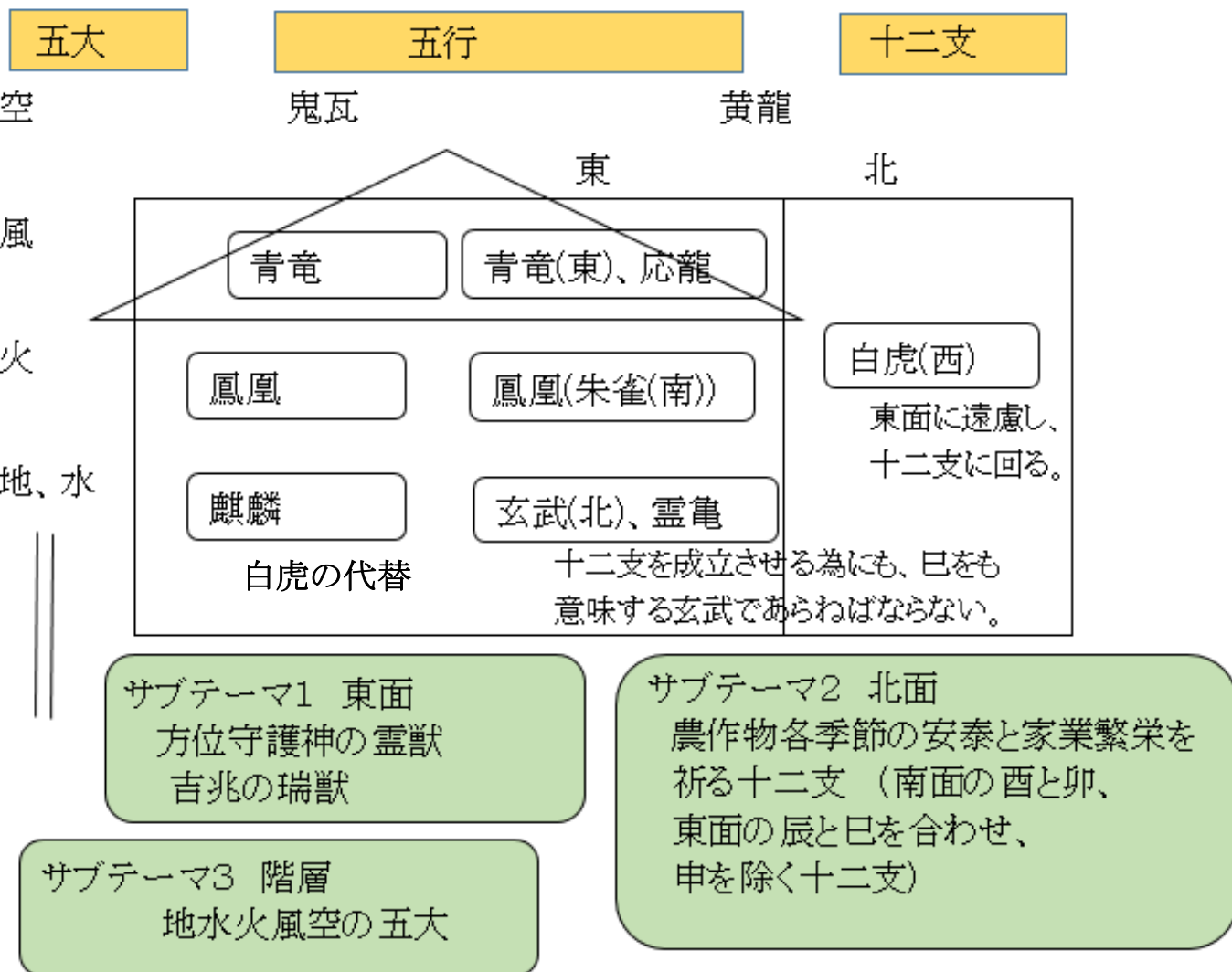
四神・四霊と
十二支を
現在の配置に

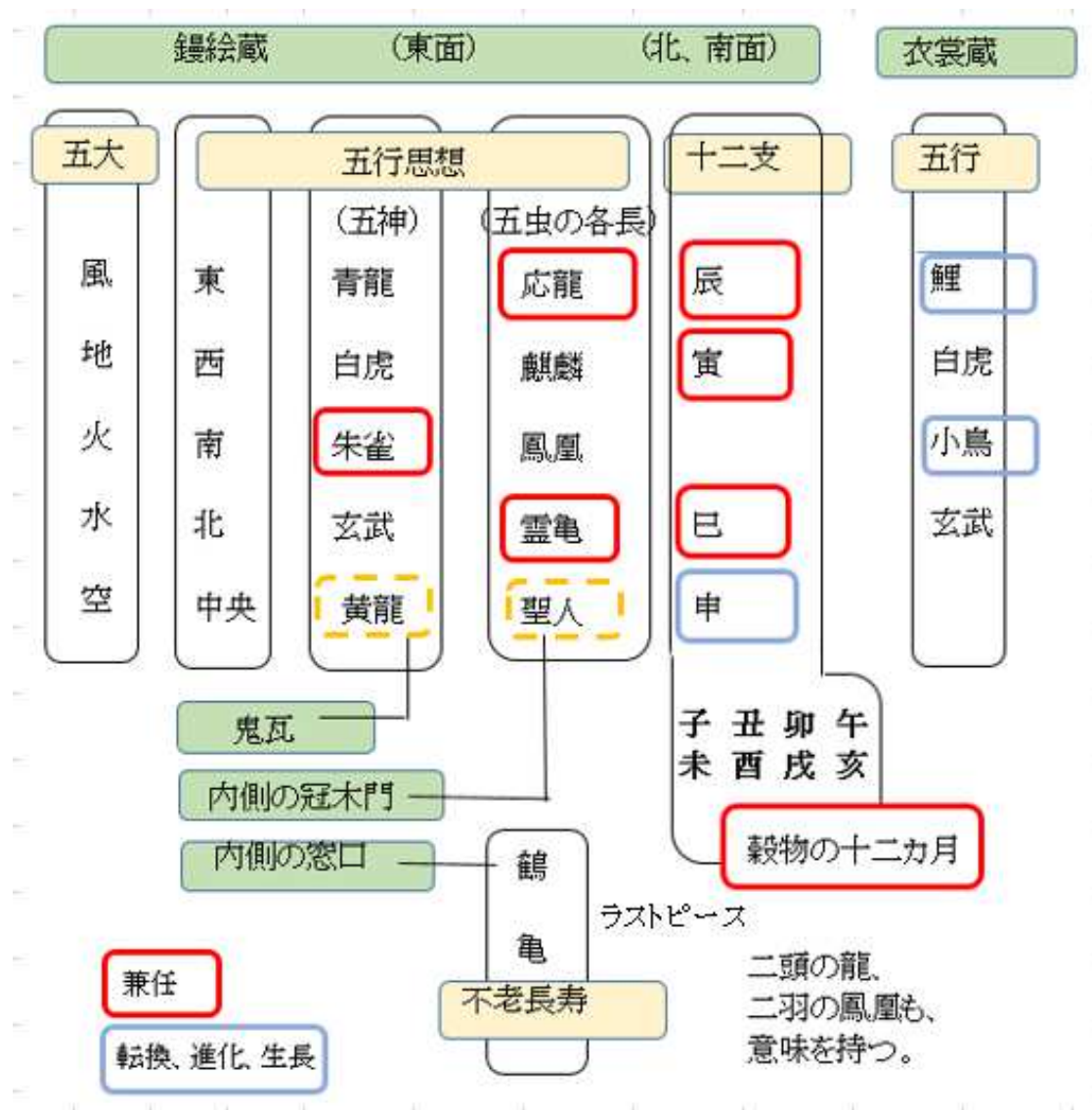
サフラン酒
鰻絵蔵の
デザイン完成

「鰻絵の美」の
ため、新しい
工夫も考案

四霊の鳳凰を使
うことに

朱雀の朱も
何とかと相談





限られた枚数の場所に、五行ほか複数の概念の動物を過不足なく登場させるという難問。

その難問解決には、「兼任と転換」という取り組みが必須でした。

補足 漢籍をはじめ高い教養の痕跡

サフラン酒他、商家の当主に、いろいろと
教えた先生役がいたに違いありません。

江戸から来た儒学者か。

長岡にいた、えらい僧侶か。

あるいは長善館、三余堂、朝陽館の先生や卒業生か。

または旧藩校崇徳館の先生や卒業生・・・。

どうやら漢学を深く学んだ僧侶の可能性が高い

『摂田屋に残る、漢籍をはじめ高い教養の痕跡』について、私は、**長永寺の木曾恵禅師とその弟子たち**、そしてサフラン酒については、それに加えて菩提寺の**定正院の方丈**により、もたらされた可能性が高いと考えています。

長岡町・長永寺の木曾恵禅(1815-1896)は、仏法流布に、町の周辺各地、摂田屋にも弟子を派遣したと云われています。仏法のほか、若い時に長善館で館主鈴木文臺に四書五経を学んだ恵禅は、当時の摂田屋の商家当主らに、親しんだ漢籍なども教えたと考えて不自然ではありません。恵禅師没後も、弟子等が当主らとの交流を引き継いだに違いありません。サフラン酒の土蔵や庭園・離れの随所に見受けられる中国文化の薫りも然りです。摂田屋の商家当主らが法話などで集まった場所は、すぐ近くの同じ宗派のお寺、浄土真宗本願寺派の光福寺ではなかったかと、考えます。

補足 神社の社殿彫刻への畏敬

寺院の仏像、その周囲の荘厳彫刻については、もともと時代を経た仏像、多くの人びとに祈られてきた仏さまと相對することができることから、首を垂れるのは自然です。しかし神社の社殿彫刻については、今まで考えたことがありませんでした。

最近、仏像についてあるWeb講演会で知ったのですが、その尊さについて、

- ・大寺の仏様だけでなく、地域の仏像も、そのコミュニティの中心である。

～村の神社も、同じはず。

- ・今、見ることのできる仏像は、絶えざる修繕で守られてきたということ。

木造では百年に一回は修繕が必要で、その努力も尊い、というものでした。

ここの社殿彫刻についても、同じことが云えるのでは、と感じました。

村の神社、薬師

村で大切に護持してきた、中之島の杉之森薬師如来と十二神将を思い出しました。創建当初の想いは伝えられていませんが、恐らく疫病退散。本尊薬師如来は神亀3年(726)、行基菩薩北陸巡錫の際の作とされ、身の丈約1.5mと大きな檜寄せ木造り座像で、寅年ごとにご開帳する以外は秘仏、本尊の両側の十二神将も神亀年間の作とされたが、平成10年調査の結果、鎌倉期の秀作とわかったそうです。昭和61年(1986)、大修理を終え風格ある仏像に蘇ったと伝えられています。近隣住民の絶えざる修繕への尊敬と、ありがたさを感じます。



2022年寅年の
ご開帳の様子